

う。途中空襲のすごさを物語る焼跡を目のあたりにする。一見引揚者とわかる異様な服装をした私を見ても、ねぎらいの言葉をかけてくれない。みな同じような目に遭って人どころではなかったのであろう。

木炭バスに揺られて故郷に降りたつたのは夕方であった。帰る日時を知らせてないので、だれも迎えに来ていない。家までの細道を飛んでかえり、ただいまと戸を開けたら、親父が不思議そうに見つめて、「お前、達者なのか」と言った。後で聞いたことだが、今までソベリアからの引揚者はだれでも病人で、中には戸板を持って迎えにいった人もあって、私の簡単な電報で、帰って来るのはよいが、重病人に違いない、途中まで医者連れて迎えに行かんらんと相談していたという。元気な私を見て親父がげげんな顔をしたなぞがとけたのである。

積もる話を交わすうちに、みんなが一樣に長い苦しい戦いから敗戦の憂き目に遭い、そのどん底からはい上がって、祖国の再建に挑んでいる心意気が頼もしく伝わってきて、私も生き抜いて帰れてほんとうによかったという実感をしみじみとかみしめたのである。

私の抑留体験記

新潟県 駒形 正作

朝鮮の茂山付近で終戦を迎え、八月二十日ころ、富寧に收容された。收容所には羅南大隊が收容されていた。カーバイト工場の寮らしい。終戦直後と場所が朝鮮の関係、警備が非常に厳しく、周りは鉄柵が高く張りめぐらされ、一定の間隔で高い見張り台、自動小銃を持った歩哨が昼夜の見張り、最初は逃亡者が出たため、見せしめの銃殺、うっかり柵に近寄り射殺される悲惨な事故も起きた。

糧秣が非常に不安定で、遅延で三日間絶食、炊事は各班ごとの飯盒炊さん、糧秣分配は本部、中隊、班と、回数を重ねるたびに減量、一食一杯のかゆも、米粒が教えられる。一週間の食糧を一食で食べて満腹を感じる程度。糧秣は粳、玄米、大豆ばかり二十日以上、小豆ばかり二十日以上も続き、寝ているのが精いっぱい。起き上

がると、立ちくらみがして、前に倒れる状態が続いた。

衣類は着の身着のまま寝起きし、六畳間に十人、互い違いに並び、上にむしろを掛けて寝る。衣類は体の油と汚れて真黒、雨をはじくほどだった。十月末ごろ、羅津大隊が弱兵として延吉に移動した。すると、間もなく隣に一個大隊入ってきたが、大分体が弱っているらしかった。十二月に入ると死亡者が続き、うちの隊より毎晩不寝番が出るようになった。チブスらしく、多いときは十人くらい出る。

その埋葬の穴掘りが、飢えと寒さと土の凍結が重なり、大勢で一日がかり、毎日の連続で、とも倒れを覚悟の毎日だった。そのうち三年も暮れ、翌二十一年一月、小茂山の収容所に移動、ここは幕舎生活だった。そのうち壊血病患者が出始め、山より松葉をとって食べる毎日だった。

三月の移動で入ソ。琿春まで貨車、国境を歩き入ソ、また貨車でウオロシロフ労働大隊収容所に入った。公園の隣、未完成の大きな赤れんがの建物で、舎内は二段装置ペチカで暖房もとれ、炊事場も別棟で完備されていた。

る。食事は朝晩穀類のかゆ、昼は黒パンにスープ、寒さが厳しいので油類は欠かさない。労働するには量的に物足りない。入浴は近くの病院の浴場、十日に一回くらいだった。

この労働大隊は建築と、農場、伐採、分担組に分かれている。冬の朝は零下三十度は普通、六十度近いこともあり、屋外労働は一応零下三十度まで、それ以上は三十度上がるまで待機というくらい。だが建築資材のれんがの貨車が駅に入ると、昼夜、寒さを問わず、狩り出される。星の降るような冷えきった夜、冷えきったれんがが降ろし。動きを止めると手足の感覚を失い、凍傷。最初は寒さになれないため凍傷患者が出た。

建築の中でも左官が主体。れんがが建て屋内の天井、周囲、全部砂壁仕上げ。れんがブロック積みも左官だ。最初の仕事は病院の内装改修。この病院はシベリア出兵のとき、日本の司令部だったとのこと。壁、ペンキの塗りがえ、壁に色の吹き付け等で、完成まで約一年かかった。

ノルマは、ジャバラは達成できたが、横壁は多すぎた。

未達成、ノルマについては特別厳しいことは言わなかった。左官はほとんどが屋内作業で、冬は砂が凍っているので、湯で砂壁をつくり、また塗った壁が凍らない様、暖房をとるので、冬でも休まず作業ができた。

昭和二十二年の半ばごろだろうか、反軍闘争が行われた。今まで軍隊の階級によって何ごともなされてきたので、いろいろと不満があったが、戦争も終わった今日、階級を撤廃して、抑留者同士としてお互いに協力し助け合って元気でみんなが日本に帰るまで頑張ろうということとだろうか。作業の自主管理、作業も今までのように、ソ連側の指示によりその日暮らしてなく、両責任者が前もって完工期を約束し、作業責任を一切任せる。

委員会制度が取り入れられ、各職場の適任者が選出され、運営に当たった。アジプロ隊も組織され、壁新聞、また各班ごとに新聞解説等もお互いにやるようになった。不法行為により同土に迷惑をかけ、注意しても反省しない者は批判会にかけられ、なお反省しない場合は、反動扱いとされた。

その後、食事も平等になり、作業も自主管理なので、

お互いに協力し合うので、職場も明るくなり、休憩、昼食、作業終了等、作業の都合で、責任者の自由になるので、張りが出るようになった。

昭和二十四年二月ごろ、やけどで二人、オジョルナヤ病院に入院した。この病院は日本人だけの病院で、医師もほとんど日本人だ。約二か月くらいで傷も直り、病院の勤務者として働くことになった。

すると六月末に病院に帰還命令が来て、ナオトカに集結したが、病院の関係で一日くらいで乗船したのか、ナオトカ港に大勢集結しているくらいしか記憶に残っていない。

朝、乗船が始まり、完了すると、二隻の輸送船が出航した。前が高砂丸で後ろが信濃丸だった。夕方近くになると、空が真っ暗になり、急に海が荒れ出し、甲板から船員まで引き揚げた。次第に嵐が激しくなり、一時は船内が大混乱した。

船は舵がとれず、朝鮮の方へ流されていくと船内放送された。さてはこれが最後かと、一時は思った。その後、次第に嵐もおさまり、一時の疲れでみな眠りについ

た。舞鶴港に入ったのは七月一日の夕方近く。上陸は高砂丸、信濃丸は翌朝上陸した。

動物扱いの一年有余

千葉県 土橋治吉

終戦時、私は朝鮮の感興の市内の学校に駐屯していたのである。昭和十五年十二月一日現役兵として北支派遣軍要員として上野一本松広場に集合、十二月四日芝浦港出帆、十二月七日北支山東省青島港上陸、二日後に済南の南泰安県泰安の部隊第五十九師団独立歩兵第四十五大隊第四中隊に入隊、鉄道警備のかたわら第一期の教育完了と同時に、北支、中支に転戦五十三回、この間に旅团长、軍司令官大将の伝令長の勤務に服す。このとき、陸軍曹長を拝命していた。天皇陛下の御為に死を覚悟して、また軍人勅諭五カ條の誓文を精神としていたのである。

終戦のとき二十五歳であった。終戦のとき、なぜ感興

にいたのかというと、昭和十九年初めに私たちは第十二軍の中に入れられていて近衛兵として皇居を守備するという任務があったからである。このため感興港より日本海を渡るために来たが、日本海には敵の機雷が敷設されていて渡航できず、この学校に宿泊して対ソ戦法の訓練に明けくれたのである。

八月二十日終戦。天皇陛下のお言葉をラジオで聞いて、兵全員激涙した。数人の将校は自決したのである。

翌日ソ連野戦軍の約百名の男女兵が宿泊兵舎を取り巻いて武装解除を要求してきた。部隊全員兵器を持って全員校庭に集合。このとき完全に兵器はソ連兵に没収されたのである。これから先の九月十三日、兵舎を出発するまでの間、約一か月余の間、八回に至る非常呼集をかけた。官物私物持ち物全部携帯して庭に集合させられたのである。その都度、目ぼしい物は没収されてしまったのである。あと残された持ち物としては、外套、飯盒、水筒、冬長靴、毛布その他日用品若干である。食料になる品物は携帯を許されなかった。

九月十三日朝四時、非常呼集があり、全員集合させら